
アンノーン-unknown-

伊師神 獅雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノーン・unknown -

【Zコード】

N6202N

【作者名】

伊師神 獅雨

【あらすじ】

突如あるサイトに書き込まれた人類危機の予言。それから8年後のクリスマス、ネット上で1000万人の友人を持つ大学生、神谷祀裏は通り魔の脅威に脅かされていた。その正体を知った祀裏は驚愕の事実を知る。テロ、ウイルス、黒組織。ネットを駆使した非科学的で非現実的な世界が平行線と境界線の狭間に今、垣間見え始めた。

0001 · X · m a s (前書き)

最初の説明が少し長いので、飛ばして読んでいただいても結構です。

『【Unknown】これが最終警告だ。人類はある脅威に脅かされている。状況はあまり……否かなりタチが悪い。特にこの約2年間は注意せよ。2035年12月～2037年1月。繰り返す、2035年12月～2037年1月。決して忘れるな。このメッセージは1週間後の2025年12月24日に自動消滅する。出所は調べても無駄だ、既に手筈てはずはついている。以上だ。』

この文面は一部ネット上で凄まじい話題を呼んだ。内容も勿論だが、記述通りに物事が進んだ事がその原因である。2035年から2年間については不明だが、このアンノーンコーナーの出所は検索が不可能となつており、きつかり1週間後のクリスマスイブにメッセージは管理人の手を使わざして削除された。その後文献の検索は続けられたが、完璧なる出所詳細の抹消まつしょうにより捜査は中断された。

? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ?

2033.12.24.Sat 20:38:19

世はクリスマス一色というのに、自分は大学生ながらバイトに明け暮れている。レジの横で税込み105円の品をドライバーみたいな機械にかざすのが僕のクリスマス。

僕が子供の頃と何も変わらない世界。急激な発展を手にした日本はその衰えが始まるのも急激的なものだつた。20年前からこの日本は……日本だけじゃない、世界は止まつてしまつている。テレポーターもタイムマシンも空飛ぶ車も猫型ロボットも、何一つこの世界には存在しない。進歩するのはネットの世界だけだ。2010年頃から注目されているソーシャルメディアサービス。世界の誰とでも話せたり遊べたりできるという美点を認められ、今も人類を一つの大きな家族にするため大きな注目と脚光を浴びている。

さえないクリスマスをまた僕もこのソーシャルメディアとともに過ごしているのだ。

Digitized by srujanika@gmail.com

ケータイの音だ。僕の友人が、僕を求めてる音。僕を必要とする音。僕を呼んでいる音。

「おい、仕事中はケータイの使用はためだろ。社会の常識だぞ」「すいません先輩。友達がうるさくて」

「アーティストのアート」

8年前、あのメッセージが現れてからというものの携帯電話、パソコンの普及率は爆発的に上がったそうだ。たった一つの文を求めて、たくさんの人間が何かに取り憑かれたように。というのはいくらなんでも大袈裟かもしれないが、それぐらいの社会現象へとなつた。それと同時にメッセージが公表されたソーシャルメディアサイトの人気も爆発。炎上どころの話しじゃなかつたようだ。そしてその人々の一人として挙げられるのは紛れもない、僕だ。

このメッセージに興味を持つた人間は数少くなかった。単なる厨二病患者が書き込んだ馬鹿げた文章で終わるはずだったが、政府、警察、専門家が全力で捜索した出所、身元が見つからない事を引き金に全世界の話題へと変貌していったのだ。僕はその事件と関連のある事件との相互関係を必死に追跡した。あのころの幼い僕は12歳でないとあらゆるサイトに手を出し、この事件に関する情報を集めた。広めた。見た。感じた。考えた。そして。

「なんか言つたか？」

「なんでもなこつすよ」

あつそ

ケータイの画面上には一つのアプリが開かれていた。友人帳というアプリだ。ネット上で知り合った人々の数を自動でカウントしてくれるアプリだ。出ている数字は【10007024名】。これは一体どういう冗談なんだ・・・。

? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ?

2033.12.25.Sun 2:46:28

日にちも変わり夜も深まつた頃、バイトの時間は終了し先輩と別
れ自宅へ向かう。

2033.12.25.Sun 3:07:11

自宅へ着いたのはバイトが終わりちょうど30分程度の時間だつた。帰り際もらつた店長の差し入れ（カツブ麺）のビニールをピリピリと剥がし、お湯を沸かした。沸騰するまで時間があるのでネットを開く。寝る事が嫌いな人間というのは僕のような人なのだろうか。今日も特に愛用しているサイトを開き、友人を探る。「だれかいるだろうか」

力チツ

- 『【アンドリュー】クリスマスイブはどうだったの（・・・？）』
- 『【@E】傷に塩をまぶすな』
- 『【アンドリュー】まぶしちゃうのかよ』

相変わらず馬鹿な会話だ。寒い外から帰ってきた僕にはぴったりな心温まる会話だ。

- 『【Alfred】さんがログインしました。』
- 『【Alfred】こん。湿気た会話してんな今日も』
- 『【@E】アルフ。最近見えないからどうか行っちゃったんじゃないかつて』
- 『【Alfred】ああ、ここんとこシフトが入つてな』
ここで紹介しておこう。アンドリューの本名は伊師神いじがみ紅樹レッドツリー。中學からの幼なじみだ。当時ネットの影響で気がおかしくなつていた僕を更生してくれた唯一の恩人だ。
- そして@Eはネット上で知り合つた人物で、口が少々悪いが女だ。そして生糞のバカだ。

『【アンドリュー】よかつた・・・。連絡くれよ』
『【Alfred】??お前らしくないな。そんなに心配してくれ

るなんて』

『【アンドリュー】べ、べつに心配なんかしてないんだからねっ
『【Alfred】いや可愛くねーよ。どこに萌えるんだよ。』

『【アンドリュー】といつのは『冗談』で、本当に心配したよ。最近そ
こらで“通り魔事件”起きてるから』

『【@E】バカッ、アンドリュー！！！』

『【アンドリュー】あ・・・・す、すまん・・・』

『【Alfred】んああ、大丈夫だよ。こっちこち心配かけて悪
かったな・・・』

話は変わるが僕の母親は僕が小学生のとき、田の前で通り魔に殺さ
れています。

? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ?

2025.12.17.Wed 20:50:00

僕はちょっと早いが、クリスマスプレゼントを母親と買いに来て
いた。街中もまだ一週間前だというのにクリスマスマードがたちこ
めていた。カップルがあちこちに窺えたが、小学生の自分は興味も
なかつた。そのまま百貨店に向かうため歩き、交差点に差し掛かつ
たところだった。【黒いアイツ】がやってきた。

【黒いアイツ】、あの無差別通り魔の事を僕はそう呼んでいる。
向こうから走ってきたかと思えば、こちらに来るまでに刃物を女性
2人、男性1人に刺し、僕の方めがけてやつてきたのだ。もうダメ
だと思った瞬間、目の前に何かがかぶさつた感覚があつた。僕の、
母だった。僕をかばい犠牲となつたのだ。去年より早く降つてきた
雪にはそぐわない真っ赤な血が滴り、母が倒れると同時に僕もヒザ
をついてしまつた。声も出ず、涙腺もゆるまず、怒りも、悲しみも、
全部がかき消された瞬間だった。【黒いアイツ】が流れるように逃

走用の車に乗り込み逃げていくのには田もくれず、田もよじわざ、
その場で座り込んでいただけだった。

2025.12.17.Wed 21:00:00

母は目を閉じ、命を失った。そういえばちょうどネット上での
人類危機のメッセージが書き込まれた時刻だ。

0002・余興（前書き）

『』でかじまれていてる会話はネット上のもの。
「」でかじまれていてるのとは通常の会話です。

2033・12・25・Sun 13:20:55

p.i p.i p.i p.i p.i p.i ! ! ! ! ! !

携帯の音だ。僕の友人たちが僕のサイト、ブログに書き込んでくれると携帯が鳴るように設定されている。そのおかげでこのままで田中寝てしまいそつた自分を起こしてくれた。携帯を開く。特に重要なメッセージはなさそうだ。フライパンを出し、卵2個とベーコンを数枚をその上に広げ、焼いていく。大学生の一人暮らしとして自炊は当然である。まあ至って簡単なものばかりだが。

2033・12・25・Sun 16:49:23

p.i p.i p.i p.i p.i p.i ! ! ! ! ! !

またメッセージが届いた。しかしその内容は友人からのものではなかつた。

『【Unknown】君は、かみたに神谷まつり祀裏で間違いないか』

「あ アンノーンゴーザーつ ! ! ! ! ! ! ! !

いやしかしどうせ成りすましだろう。アンノーンと名乗れば誰でもなりきることができるのだから。紅樹の悪戯いたずらか？

『【Alfred】さん、ログインしました。』

『【Alfred】なんだアンドリュー。冗談が下手になつたんじやないのか？』

p.i p.i p.i p.i p.i p.i ! ! ! ! ! !

『【Unknown】質問に答える。君は神谷 祀裏で間違いないか』

なんだ、しぶといな。今日は意地でもノつてもらいたいらしい。

『【Alfred】まだやるか。わかつたよ。はいはい僕は神谷

祀裏で間違ひありませんが何か？』

p.i p.i p.i p.i p.i ! ! ! ! ! !

『【Unknow】8年前、君の母親は殺されているか聞きたい』
「つー…………！」

『【Alfred】おこおい、アンドリュー。冗談にも限度つても
のがあるだろ？！』

『…………』

『【Unknow】質問に答える。8年前、君の母親は殺されて
いるか聞きたい』

「な、なんだよコイツ」

昨日はあんな素直に謝ったのに今日はどうしたんだ？まさか本当の
アンノーンコーナーが…………。

…………

『【Unknow】早く答える、時間がない。君の母親は8年前
の殺されているのか。』

「くっそ」

どうする、もし本当のアンノーンコーナーだったら…………。

?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?

8年前の通り魔事件は僕が来ていた表参道以外にも、青山、銀座、
原宿、代々木、秋葉原でも起きており。それがほぼ同時タイミング
で発生し、犯人の全員が未だに捕まっていないのも重要性を物語っ
ている。そしてもう一つ。あの人類危機を伝えるメッセージである。
これも通り魔事件と同時に発生しており、関連性を持つていては
ほぼ間違いないだろう。

これらの事から通り魔事件はメッセージ公布の余興だったといえ
る。これが現時点まででいえる【死のクリスマスイブ】の全貌だ。

2033.12.25.Sun 17:30:31

『【Alfred】確かに殺された。表参道、某百貨店前の交差点
の俺の目の前で通り魔に殺された』

「」のメッセージを送つてからというもの返事はなかつた。アンドリュー や@Eにも確認したが二人ともアンノーンユーザーが送つてきた文面に見覚えはないらしい。やはりあのアンノーンユーザーは本物だつたのだろうか。

2033.12.31.Sat 8:00:59

今年最後の朝はあまり目覚めがよくなかった。今日は紅樹ともう一人、幼稚園からの幼なじみの赤羽 宮瑠美に除夜の鐘を聞きに行こうと誘われていたのだ。しかし集合が午前11時とはこちらもやはりバカなのだろうか。ひとまず食パンを焼き、コーンスープの素にお湯を注ぐと僕は腹いっぱいになつていた。

? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ?

2033.12.31.Sat 11:05:27

「ゴメンゴメン、遅れちゃつた」

「計画者が遅刻とはとんだご身分ですな」「だからゴメンつて言つてるでしょ、もう」

「そのへんにしつけて」

本当にこの二人は仲がいいのか悪いのかわからない。まあ小学生から同じで仲が悪いというのもおかしな話だが。

「んで？計画者さん。今日はどこに行くんだ？」

「え？除夜の鐘聞きに行くつて言わなかつたっけ？」

「いやそれはわかつてる。夜までどこで時間を潰すのかつて言つてんだよ」

「ノープランかよ！！！」

バカ仲間として@Eを紹介したいわ。一人の会話を聞いてみたいよホントに。にしてもなぜ集合場所が大学なんだ？なにかのフラグか？

「あー！祀裏先輩！！！」

報告：フラグは回収されました。

「またお前か、何の用だ？」

「ん? 誰だこの小動物は」

「小動物じゃありません！！！柳真朱です！！！祀裏先輩の後輩です！！！」

いや祀裏生

いや祀裏先輩って言つてゐる時点でお前は僕の後輩だろ。

「かわいい後輩を持つてたんだね。 1年生？」

いや業たちが2年生の時点で後輩は1年生だ

女はバカ前提なの？

「サインもらいに来たんですね」

「またか、もういい加減にしろ」

「サイン?」

「ああ、僕が埼玉の大学とテニスの対抗試合があつて、そこで僕が

外ノハナが

「一九九五年三月三十日、『新日本』紙に

「普通の書籍なんていヤサマンなんで書かれー

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର

一 備書

私書

元々の上

なにそのまるでいつでもかっこいいサインが書けるように練習して

いのうな厨_一つぱりは

「じゃあせめてアドレスくだせこむ」

「あれこれございました」

2033年12月31日11時20分22秒。ある程度かわいい後輩のアドレスを入手した。

「じゃあ、私はこれで

「ああ。せーぜー通り

「なんですかそのイヤハナセツフセ」

そうして柳は立ち去つていつた。

「久々に出たな」

「あ?」

「本当に心配しているときにしか言わない掛け言葉」「別に心配してるとかそういうんじゃないんだからねっ」

「お前のツンデレも誰も得しねーよ」

今日一番のボケも軽くスルーされてしまつたようだ。

? - · ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ?

2033・12・31・Sat 14:46:08

僕は泣いていた。この時刻。上を見上げた瞬間、蒼白な表情をして泣いた。叫んだ。なぜって?僕は預言者になつてしまつたからだ。僕の言つた事が本当になつてしまつたからだ。あの後3人でやって来た街中の巨大モニターに映し出されていたのは。

柳 真朱が通り魔に刺されて死亡した現場だつたからだ。

2033
·12
·31
·Sat
16
·10
·45

その後僕らは除夜の鐘を聞きにいくことなく別れ、それぞれがそれぞれの家へ帰つていつた。僕と宮瑠美は泣きに泣いた。周りの人々が引くぐらい泣いた。紅樹は泣いていなかつたが、心なしか誰か一人強くないといけないと思ったのだろう、その涙を強く握つたこぶしの中に押さえ込んでいるようにも見えた。今にも大声で叫びだしそうだった。でも泣く事はなかつた。

強いなあ
紅樹は

こんな気分じゃメッセージを見る気もなかつた。僕らしくないな。
どんなに忙しくても、眠くとも、疲れていってもメッセージは一番に
見ていたといふのに。

しかし僕は25日の事を思い出した。アンノーンユーザーのメッセージだ。僕はこのメッセージを【Uメール】と呼んでいる。UnownとUserの“U”を取つて【Uメール】だ。

そしてその【しメール】が今までに届いたのではなーいかと僕は予想した。先日クリスマスプレゼントとして自分で自分で自分に買ってあげたスマートフォンの画面を開き、内容を確認した。やはり予想通りだった。

【Unknown】柳真朱は今日、亞城台大学を出た後表参道の交差点で殺されたか聞きたい』

先週買つたばかりのスマートフォンを地面に叩きつけていた。無意識に。反射的に。2010年代のものとは違い、より壊れにくく機能性に優れているそのスマートフォンに外傷はなかつた。しかし僕の心情はもう外傷だけでは済まなかつた。おえつすると急な嗚咽に身まわれ、約2時間嘔吐感が止まなかつた。

以前はしつこく答えを迫っていたアンノーンコーナーからの【メール】はもう来ていなかつた。

? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ?

2034.1.7.Sat 08:01:21

あれからショックで一週間寝込んだ。気も安定し、嗚咽症状も見られなくなつたため医師から大学へ行つていいとの許可を昨日もらつていた僕は今日から再び大学へと通う事にした。

「ま 祀裏！ !」

「心配かけたな」

「大丈夫なのか。だいぶ苦しんでみたいだつて」「誰から聞いたんだ？」

「@Eだよ。ずっと慰められてたんだろ？」

「ああ、だいぶ救われたよ。今日お礼言わなきやな。お前も今日の23時にログインしてくれ」

「ん？いいが、俺が行く必要ないか？」

「ああ、お礼ともう一つ話したいことがあるんだ。ここじゃ話せない」

「?????」

「必ず来いよ。待つてるからな」

「わ、わかった」

「じゃあ僕実習あるから行くわ。また後で」

「おう」

「いっにはやはり話しておかなくてはいけない。アンノーンコーナーの事と【メール】の事を。今回の通り魔事件に関係してないわけないのだから。

? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ? - - ?

2034.1.7.Sat 23:00:00

『【アンドリュー】さんがログインしました。』

『【アンドリュー】来たぜ つて何だこの人数はっ！

! ! !』

『ルーム8 - :9806名ログイン中』

『【Alfred】よし全員そろったな。これからはサイトの炎上を防ぐため発言は最小限にしてくれ』

『1000万人から重要な友人を絞つてもやはりこれだけの人数になつてしまふのか。僕がまとめなければ』

『【Alfred】結論から言つ。本物の【Unknown】からメッセージが来た』

『【ab - 阿修羅】ノシ』

『【Alfred】何だ』

『【ab - 阿修羅】なぜ本物とわかる?』

『【Alfred】僕の名前。そして母が殺された事を知っていた』

『【ターンエー】誰かが成りすましてるんじゃないのか』

『【Alfred】僕の本名を知っているのはアルフレッドだけだ。』

『【@E】外部から来てないの?』

『【Alfred】このサイトは同じコーナー名が被つていると登録できない』

『【m w m w m w m】そんで?』

『【Alfred】本題だ。Unknownコーナーの正体と先日

起こった通り魔事件の犯人を探してほしい』

こんなの誰も協力してくれないだろうと思っていた。でも結局は力へと変わった。全員が了解の返信をくれたからだ。9806通の了解の返信。涙がこぼれそうだった。良い友を持つものとは言つがいい友が集まればどうなるのだろう。そんな事を考えているだけで心が晴れた。挫ける必要はない。後は進むだけだ。みんなが僕の背中を押してくれる。これが一週間決意を固めた結果だった。ドッキリ

でこうとの【大成功】つてやつだ。

『【Alfred】みんな、無理はするな』

? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ? - · - ?

2034.1.10.Tue 10:18:44

アホみたいに天気のいい朝だ。あれからいくつか情報は来たがこれといって重要な情報はなかつた。柳 真朱の葬儀は身内だけで行われたそうだ。

今日の予定としては赤羽 富瑠美とショッピングモールに行く事ぐらいだつた。紅樹も来る予定だつたが、サークルに呼ばれてしまつたようだ。陸上サークルなためスケジュールも過密極まりないとの事。

しかしそれを聞いて心配になつてしまつた事がある。いくら幼なじみといつても女性と一人でお出掛けなど、どうからどうみても【デート】ではないか。昨夜の僕は半乱狂、半混乱、半錯乱状態だつた。

ぶりだな』

『【Alfred】いやその通りです。一瞬超能力者かと思つちや

うくらりい見事な推察です』

『【@E】んで、幼なじみつてのは例の富瑠美ちゃんか?』

『【Alfred】ああ。』

『【@E】いざこへ?』

『【Alfred】川崎ラゾーナだ』

『【@E】 109シネマズで映画鑑賞後、下階でそれぞれの洋服を
買った後、うな丼でも食べてゲームセンター行つて時間余つたら近辺の力
ラオケにでも行つて公園でラブラブして帰りんしゃい』

『【A1f'red】 何その楽しくないわけないデートプランはっ！
！彼氏いないよね？！てか公園は余計だよ！？』

『【@E】 恋したいけどできない女の方が妄想力に長けているのだ
』

『【A1f'red】 いや別に威張れないけどね！？』

『【@E】 手を無理やりつなぐな、会話を途切れさせな、いつもど
おり接しろ。俺から言えるのはそれだけだ』

『【@E】 さんがログアウトしました。』

なんだその捨て台詞みたいなの、めちゃかっこいいんですけど。て
か“俺”つつたる最後。情に入りすぎだろ。

2034.1.10.Tue 8:45:00

決戦のときだ。

2034.1.10.Tue 9:00:01

「あつ、お~い。祀裏~」

「つーーーあ、おお~」

「ゴメン待つた?」

「お、あ、い、今来たとこだ」

1時間前からスタンバつてました。

「そう、じゃあ行こうか」

「お、おお~」

富瑠美は楽しそうにスタスターと歩いていった。後ろ姿に思わず見とれてしまった。にしても富瑠美の私服、なんかいつもより気合入ってないか?! いや今日はあくまで【友人】とお出掛けなのだ。そんなはずはない。

「遅いよ、祀裏! 映画始まっちゃうよーーー!」

残念ながらその心配の必要はない、映画開始の1時間前に集合をかけたのだから。今日はなんとしても富瑠美を楽しませなければならない。徹夜で会話も考えてきたんだ!!

「あ、わ、ゴメン。ところでその服可愛いになつーーー!」

「え?」

うわつしまつたあ。焦りすぎて全く関係ない時に関係ないこと言つちやつたよ。。。。。しかも朝の通勤時間で人も多いのにかなりでかい声で言つちやつたよ。どうすんだよこれ。なにがところでだよ。気ますすぎるよ。

「あ、その、いや。。。」

自分自身のフォローも出来ないのかよ。

「。。。」

「す、すまんいきなり大声。。。」

「ありがとう」

「え？」

あ、ありがとう？蟻が十？有難う？

「今日は気合入れてきただよ。久しぶりに祀裏とふたりで【デー

ト
た
も
ん
ね

なんた
せこは寝台入れて来たんた

ג פג

「え、
ああ

なんだか今日は宮瑠美が世界で一番可愛くみえる。気のせいだろうか・・・。

? - . ? - . - ? - . - ? - . - ? - . - ?

2034 .10. Tue 21:30:42

גְּדוֹלָה מִזֶּבֶחַ בְּנֵי יִשְׂרָאֵל

「まさか祀裏がYU工歌

「そのネタかなり古くないか？」

あー、まだ余計な事を次第入力せがつて。。。

「じゃあ、リード。私は南武線だから」

「ああ、いやな」

「ああまた」

フラグみたいなセリフを吐きやがる。

卷之三

もう聞こえていなかつた。しかしそだ後ろ姿は見えている。

僕の頭には先日の通り魔事件のことがよぎつていた。僕は同じ過ちを繰り返すのか。

「くそつ」

母さんも後輩も失つて今度は“好きな人”まで失うのか。あんな思い、もう一度と繰り返したくない。

「待つてくれ！！！！！宮瑠美！！！！！」

嫌だ……嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！嫌だ！！また大切な人を失うなんて嫌だ！！！！！」

「宮瑠美！！！！！宮瑠美！！！！！」

その日は帰宅ラッシュがすごかつた。人ごみを搔き分けても、搔き分けた所から人が湧き出でくるようなそんな感じ。前に全く進めなかつた。

「宮瑠美！！！！！宮瑠美いいいいいいいい！！！！！」

気がつけば、南武線に乗り込んでしまつていた。宮瑠美はものすごい驚いたようにこちらを見つめていた。そして僕自信も驚いていた。なぜなら、宮瑠美を無意識に、抱き寄せていたからだ。乗客の目はこちらを向いていたがそんなの気にならないくらい精一杯だった。

「ま……祀裏？」

「殺させない……」

「え？」

「通り魔だろうと殺人鬼だろうと僕はお前を殺させない……」「ど、どうしたの？」

あのメールに返信したときから始まつていた。責任は僕にあつた。僕に関わる人間は僕自身が守らなくてはならないと。誓つた、悟つた、それが僕の、僕自身の決意だ。

?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—・?—

「家にまで送つてもらつて、ありがとう。電車の事は驚いたけど、

嬉しかつた

一
あ
あ

「また遊びに行こうなんていわないよ」

-
え?
」

「これからずっと遊んでいよう」

お前らしいな

「黒鹿にしてんの?」

いや。じゃあ、ありがとうございます。元気でた

よかつた。そんじやね

-
ああ
「

家の扉がしまるまで僕は彼女を見守っていた。これで安心して家に帰れる。そう感じて一步踏み出した瞬間だつた。

銃口が背中に突きつけられていた

?— . - ?— . - ?— . - ?— . - ?— . - ?— . - ?

片手銃を持つた小柄な男一人とジャックナイフを所持した大柄な男が一人。以前空手と合気道をかじつてたとはいえ2人は厳しい。せめてこの小柄な男が怯めば。

「目的は何だ」

お前のIDだ

「正確」な僕の【アソビ】じゃないのか?」

「その通りだ。1000万人の人間を手玉に取るような奴はお前ぐ

「らしいしかないからなあ」

「手玉？」

「あ？」

怯んだ！！！

卷之三

何
引
之
上

男が上を見た。大柄の男も上を見てる。

一ノ木二小讀

あまいは小糸たが
上を見上げ走り出した小糸の男は足を掛け転は
せる。

しし轉ひたVVV

「ううう生意気な小僧かあ！！！」

僕も足を掛けられない

「素手で挑むか、いい一度胸だ

「素手で挑むか、いい度胸だ」
僕も足を掛けられ転倒。後ろからは大柄な男。切り替えて構える。
とつぐに銃は地面に着き小柄な男が取りに行く。こいつを相手にしてる時間がない。大柄な男がこちらに向かつてきた。構えが素人。特に訓練は受けてなさそうだ。すかさず避け、背中を突く。うつぶせに倒れる男。

卷之三

「残念だつたな。人数の勝ちだ」

しまった

銃声。小柄な男の手から銃が吹き飛ぶ。上から聞こえた。屋根かつ

!

「君がアルフレッドか。お初に御目にかかりますねえ」

論
文

阿修羅と申します。以後お見知りおきを」

阿修羅 【 a b - 阿修羅】かー!

「アルフレッドだ。助けてくれ」

「お望みどおりに 「.

2034.1.11.Wed 0:20:32

「そこ」のジャックナイフ!—!

「くつ」

「後はお前だけだ。抵抗するなら容赦はせんぞ?」

「チツ、神谷祀裏。お前は常にじこくの射程だ。逃げ場などないからな」

「僕が自らその道を選んだ。言われなくとも理解済だ」

そういうと男は走り去つていった。誰も後を追わず、追いかけず闇へと消えていった。

2034.1.11.0.45.40

大柄な男は去つていった。そして残るはこちらの小柄な男。氣絶している。

「この男は私がつれていきます、あなたにもちょっと着いて来てもらいますよ」

「構わないよ」

そういうと阿修羅は人を連れ去る盜賊のように男を肩に担ぎ上げた。

「！――！」

「ど、どうした？」

担ぎ上げた瞬間阿修羅の顔は驚愕したようになつた。そして男をおろすと服を一枚脱がし始めたのだ。すると僕もさすがに気付いた。

「お、女？！」

「ええ、担いだ瞬間胸があることに気付きました。どうりで小柄なわけです」

暗かつたため今まで気付かなかつたが、小柄な男だと思つていたこいつは紛れもない女性だったのだ。声は極めて精巧なボイスチェンジャーで男声へと変えていたのだ。

「でもなんで声を変えてまで男になりましたんだ？」

「女だとわかると力の差で圧倒的に勝てると相手に知られてしまうからですよ。よくある手口です」

阿修羅は再び担ぎ上げると歩いていった、僕もそれについていく。「にしても大学生だとは驚きです。あの友人の数、それなりの企業家かと思いましたが

「期待にそぐわなくてすまないね。そつちこそ同じ年かと思つたら立派な男性で驚きだ」

あのサイトは個人情報をトップシークレットとしているため実際に会うか自ら説明しない限り人物像がわからないのだ。

「で、これからどこに行くんだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6202z/>

アンノーン-unknown-

2011年12月25日15時48分発行